

## 駿河台地区副所長

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学情報科学センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, 孔一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/4296">http://hdl.handle.net/10291/4296</a>

## 〔副所長所見〕

中村 孔一〔駿河台地区〕

「計算センター」を発展的に解消し、新たに「情報科学センター」が発足したのは1988年、間もなく「情報科学センター」は15歳の誕生日を迎えることになります。情報技術の進展の早さは dog year だといわれていますが、そうだとすると、15歳は、犬でいえばすでに老犬です。

情報科学センター発足の1年前、当時の計算センター所長の向殿教授は、『計算センター年報』の巻頭言で、「時代が変わり、計算センターの役割も変わって来たと言える。計算センターが荷って来た責務が、大学全体の中で極めて重大なものになって来た為に、一つの機関で負うよりは、その役割をそれぞれの特性にあった幾つかの機関で分担し、明治大学の総合情報システムとして、これらを総括する別の上位の機関が必要になって来たということである。」と述べ、「その中で、計算センターは、本来の教育及び研究の為の真のサービス機関として機能しなければならない。」と主張しています。これが、「計算センター」から「情報科学センター」への転換の動機だったわけです。

教育のためのサービスという言葉は、この時点では、主として全学的な規模での情報教育を実行することを意味していました。スタートした情報科学センターは、この課題に精力的に取り組んでいきました。センター発足5年後の1993年、当時の所長の向殿教授は、『情報科学センター年報』第5号の巻頭言で、「ハードウェアの整備は、曲がりなりにも一応の水準に達した。今度は、それを利用した質的充実の時期、広い意味でのソフトの時代を迎えようとしているということです。」と述べています。しかし、当時の教室環境は、教室内ランでつながったパソコン群以上のものではありませんでした。

外部ネットワークと接続した学内ランの構築、リバティータワーの情報設備など、その後の明治大学の情報環境の進展はご存知の通りです。今こそ「それを利用した質的充実の時期、広い意味でのソフトの時代」だといえます。ところが、情報科学センターは、その過程で、教育および研究のためのサービス機関という本来の機能を大きく超える役割を担わされてきました。

また、そうした情報環境の充実にもなって、若い教員を中心に、通常の講義やゼミに種々の情報メディアを活用する動きが出てきています。そして、そのための環境の整備やソフトの導入の要求が、情報科学センターに持ち込まれてきています。こうした動きは、近い将来、飛躍的に増大していくと予想されます。どこまで、情報科学センターが関わるのか、難しい問題です。

最後の『計算センター年報』で、向殿所長が書いた文章の出番が、もう一度ありそうです。